

7) 乳癌に対する地域住民の意識について
—村松町でのアンケート結果から—

篠川 主・横山 直行 (南部郷総合病院)
鱒淵 勉・佐藤 巖 (外科)

外科手術の説明を行う際に地域の住民がその疾患に対しどの程度の認識をもち、どのような治療を望んでいるのかを知る機会は極めて少ない。当科では平成3年より村松町と同医師会の要請で年1回住民に乳癌の講演会を、平成4年より同時に検診も行ってきた。平成5年12月検診に参加した48人よりアンケートの回答を得た。検診は必要(45/48)と考え、検診の方法も知っている(39/48)と答えた人は多かったが、毎月自己検診実施者は3人のみであった。また早期乳癌の予後のよいことに知識のある人(43/48)、乳癌の罹患率の増加を知っている人(46/48)は多かった。乳房温存手術や縮小手術を是非受けたいとの希望(35/48)、病名の告知に肯定的な人(45/48)も高齢層に至るまで多く診療上配慮すべき資料と考えられた。

8) 術前 PTCA を施行した消化器疾患手術例
について

藤島 丈・石原 良 (鶴岡市立荘内病院)
乾 清重 (胸部外科)
三科 武・丸田 智章 (同 外科)
池主 正臣 (同 内科)

術前に経皮的冠動脈拡張術(PTCA)を施行した消化器疾患手術を3例経験したので報告する。

症例は胃憩室、下部食道癌、直腸癌の3例で、心臓カテーテル検査にて症例1、2は右冠動脈、症例3は回腸枝に有意狭窄を認めたため PTCA 後手術を施行した。

3症例とも周術期に心筋虚血に伴う症状、心電図変化はなく術後経過は良好であった。冠動脈疾患を有する症例に対し周術期管理の上で PTCA は非常に有用であった。

9) 縦隔腫瘍 102 手術例の検討

富樫 賢一・佐藤 良智 (長岡赤十字病院)
山本 和男・高橋 善樹 (胸部心臓血管外科)
矢沢 正知 (県立中央病院心臓
血管呼吸器外科)

1980年から1993年までに当科で手術を施した102例の縦隔腫瘍を対象とし、外科治療上の問題点を検討した。縦隔腫瘍は、胸腺腫瘍43例(42%)、神経性腫瘍20例(20

%)、その他の腫瘍39例(38%)と大別でき、その他の腫瘍では、気管支嚢腫14例が最も多かった。悪性腫瘍は102例中29例(27%)で、胸腺腫瘍が29例中21例(83%)と大部分を占めていた。他所からの縦隔リンパ節転移2例を除く。原発性の悪性縦隔腫瘍の手術は、試験開胸9例(33%)、根治手術18例(66%)で、18例中12例(66%)は合併切除を要した。しかし、積極的に合併切除を施したにもかかわらず、再発率は高く、補助療法の重要性が示唆された。

10) DORV, CoA, PDA, MS, PH, Shone
症候群の1手術例

金沢 宏・高橋 善樹
吉谷 克雄・上野 光夫
山崎 芳彦・青木英一郎 (新潟市民病院)
桜井 淑史 (第二外科)

症例は8才女児、生後1カ月初めて心雑音を指摘され、経過観察されていた。7才時心エコー、心臓カテーテル検査により DORV, CoA, PDA, MS, PH, Shone 症候群と診断され、PDA 結紮, CoA 修復, PABanding と肺生検を施行された。肺生検では Heath-Edward I 度であり、8才時に心内修復手術を施行した。VSD は Subaortic type で, parachute mitral valve supraannular ridge を認めたが、僧帽弁口は十分な大きさがあり、VSD patch closure, PA debanding を施行した。術中右室圧は 50/- mmHg と低下し、術後経過は順調であった。

11) うっ血性心不全を呈した乳児肺分画症兼動脈管開存症の1手術例

平塚 雅英・大和 靖
渡辺 弘・下山 雅朗
江口 昭治 (新潟大学第二外科)

早産で胎児仮死の診断で入院した 1,114 g の極小未熟児が、高流量肺葉内肺分画症兼動脈管開存症でうっ血性心不全を呈し、抜管困難であったが、71生日(体重 1,370 g)での左下葉切除と動脈管結紮術を施行し良好な結果を得た。心不全症状を呈する肺分画症の報告は稀で文献的には世界で4例目と思われる。